

第2回学びの多様化学校検討委員会 開催結果概要

●日 時 令和7年7月31日（木）午後3時00分～

●会 場 まなぼつと幣舞 特別会議室801

●参加委員 10名

●議 事

（1）スクールビジョンについて

（2）新設教科について

（3）学校名について

（4）学校生活について

（5）登校時間について

●質疑応答

（1）スクールビジョンについて

委 員：スクールビジョンはどういった形で子どもたちや関心がある方に伝わっていくのか。

事 務 局：まずは10月の保護者説明会に使う資料に掲載したと考えている。

委 員：前回の検討委員会での皆様のご意見も事務局案に網羅されていて、非常によくまとまっていると感じている。

委 員：事務局案の「通える」はあまりハードルを上げすぎないようにとの考えか。「通える」の部分が他の案の「未来を探せる」でも良かったと思うが、その基準を聞きたい。

事 務 局：様々な子が通ってくるという前提に立つと、すべての子に浸透する言葉として選んでいる。ご意見のハードルを下げるという意味もあるし、「通える」を「学べる」などに置き換えるなど様々検討し、今回の案になったということになる。

委 員：スクールビジョンということで、どれだけ実現できるかが大事だと感じた。本当に叶えられることを提示したほうが、子どもたちも保護者も安心できるのではないか。

事 務 局：そのとおりである。そういったことからすべての子にわかりやすく伝わり、合致する言葉を選んでいる。

委 員：スクールビジョンの下に副題として記載があるが、これはスローガンとセットで周知されるものなのか。これらがセットで公表されるものであれば、「新たな学びの場」はいつまでを指すのかを確認したい。

事 務 局：ご指摘の説明の部分は事務局としても、セットで使うかどうか深く意識をせず、皆様への説明として記載している。ご指摘の「新たな学びの場」は改めて考える必要があると認識したところである。

委員長：スクールビジョンを「自分らしく安心して通える学校」とするならば、「新たな学びの場」は少し引かかるので、そこを消すと合致するのではないかと思う。

委員：「自分らしく安心して通える学校」はすごくいいと思うけれども、学ぶことが大事という事務局の考えはよくわかるが、「学校」という言葉より、子どもたちとしては「ここに来てもいいんだ」という気持ちの方が大きいと思う。学校なので「学ぶ」ということは前面に出さないといけないけれども、説明の時に「学ぶことは大事だけれど、ここに居る場所があるんだよ」ということも伝える必要があると思う。

委員：私は「新たな」という言葉はいいと思う。その子にとっての新たな場ととらえると、他とは違うという意味であり入っていていいと思う。

委員：通える学校というのも大切だが、あえて外して、来て過ごすということを大事にし、「過ごせる場」とすることを提案する。

委員：私は逆に「学校」がいいと思っている。対象となる生徒で説明のあった「まなびや」と分ける意味で「学校」とした方が明確になると思う。

委員：先ほどの説明では回復期の子どもが通ってくるということで、とても落ち込んで人間関係が厳しい子がたくさん含まれると思う。リハビリ期ということも考えた方がいい。学ぶこともそうだが、人との関係をたくさん学んでくれたらと思っている。

委員長：この意見を踏まえると、どのような表現になるか。

委員：自分がだめだからこの学校に行くということではなく、新しい道だから通うということを伝えたいが表現するのは難しい。「学校」については、学校が嫌いな子もいれば学校に戻りたい子もいるので、人それぞれである。「通える」よりは「過ごせる」方が保護者も安心できるのではないか。

事務局：私のイメージも「学校」ではなく、「居場所」である。これまでも教育委員会では様々な居場所を作ってきた。今回の学びの多様化学校はそれらに加えて新たに違う居場所を作っていくイメージである。ただし、学びの多様化学校は法律上、制度上は学校である。これまでの話を聞いたうえで、「自分らしく安心して過ごせる居場所」とし、その説明文を「学校」と整理することだろうか。

委員：このスクールビジョンをどういった場で使用するかにもよるが、スクールビジョンにあえて「学校」と入れないことでハードルが下がるような気がする。今までの学校とは違うという印象付けができると思う。

委員：委員の皆様意見を聞いて、「居場所」とした方がやわらかい雰囲気になると感じている。

委員：前回の検討委員会の説明では、結構な授業数があったと思う。居場所だと

思ってきたら結構勉強があるとがっかりするのではないか。実際に子どもたちがやることを示すのがいいと思う。

委員：今の話を聞くと「まなびや」との違いは何なのかと感じた。各学年１５名の定員があり、どこかで線を引くことになる。そこはあいまいにはできない。「まなびや」にも行けない子どもたちはたくさんいる。基準を明確にしないと、多様化学校に行けなかった子どもたちは、「じゃあ私は何なんだ」ということになってしまう。そのように感じた。

事務局：大前提として、これから申請が上がってくる子どもたちには、教育委員会でその子どもたちの状況をしっかり見定め、その子に応じた適切な支援をしていかなければならないと思っている。「まなびや」との違いについては、「まなびや」は個別指導だが、学びの多様化学校は、人数は少ないとはいえ、教室で先生が授業を行うところが大きいと思っている。その他も細かな違いは教育課程や成績のつけ方など様々ある。ご意見はその通りだと思うので、しっかりと違いは説明していきたいと思っている。

委員：専門の先生がついて授業を行うことは素晴らしいことだと思う。保護者から見たときに、スクールビジョンを「学校」とし、説明を「居場所」にする、またあその逆もあると思うが、どちらかには「学校」が入っていた方がいいのではないかなと思う。

委員：さきほど「来てみたら違った」という意見があった。しかし、教育委員会できちんと説明したうえでの募集であると思う。学びの多様化学校に来る生徒は学校に行けないけれど、勉強がしたい子で、学びの多様化学校は「ここでなら学べる」「ここに居場所がある」という学校なのではないかと私はとらえている。

委員長：説明文は事務局で再検討してもらい、「自分らしく安心して過ごせる場」といたしたいがどうか。

< 了 承 >

（２）新設教科について

委員：「ふるさと探求」は大事なことはと思っているが、一方で文科省の調査との兼ね合いを考えると、「自分の好きなこと、追求したいこと、知りたいことを突き詰めることができる」が半数を超えているので、ふるさと以外のことも探求できる素地を残してほしい。資料にある「自然・環境」や「産業・地域文化」に興味がある子はいいが、例えばプログラミングなどに関心のある子もそちらを探求していけるようにしていただきたい。

事務局：ふるさとを入り口として調べていく中で、表現したいという思いからプログラミングへ行くことや音楽の専門分野に行くものだと思っている。そこ

は制限するものではなく、広がりを持たせていきたい。

委員：ふるさとを入り口とすると、うまく入っていける子とそうではない子がいると思う。そこに興味を持たない子もいるので、入り口からいろいろなことを探求してもらい、最終的にふるさとにつなげるなども検討いただきたい。理由としてはギフテッドと発達障害を両方抱えている子どもは全国的に非常に手薄になっており、その子の関心をうまく拾い上げて伸ばしていくことを考えると、限定しない方がいい。その方がいろいろな子どもが関わっていけると考えている。

事務局：検討させていただく。

委員：先ほど授業数が多いという発言をしたが、私は多いことが悪いとは思っていない。いろいろな支援があつていろいろな居場所があることはとてもいいことである。教育委員会がこれだけ考えて、これがいいと思っていることをそのまま発信することが大切。こういうことを必要としている子たちに伝わることで、来たいと思う子がいると思う。

委員：体験的な学習はすごくいいと思っている。実際に中学校でも職業体験や社会科見学など普段行けないところに行くことはものすごい発見がある。探究的学習については、本当に不登校の子たちが自分の好きなことを突き詰められるのかが疑問である。現在、中学校でも「探求的に学ぶ手法」の学びになってしまっている。その中で、学びに向かうエネルギーが不足している子たちが、見つけていけるのが不安である。イメージがまだ見えない。

事務局：そういったことも心配しながら計画しているが、どのような子が入ってくることがわからない中、大事にしたいのは学校になかなか来られない子の自己肯定感を高めていくプロセスである。「好きなことを調べることができた」、そのうえで「まとめることができた」という小さなステップを積み重ねながら経験を積み上げ、自信をもって社会に出ていける子どもたちにしていきたいと思っている。もちろん途中で投げ出す子もいると思うが、それを認めつつ、また新しい好きなこと見つけていただき、出口は広くしていきたい。

事務局：この前の議論でも、体験や探求の主旨を取り入れた授業は認めていただいたと思っている。そこで、「ふるさと探求」という名前で狭くなっているという議論になっていると思われる。事務局で教科名を持ち帰りもう一度提示させていただく整理でいかがか。

委員長：教科名をもう一度整理いただき、内容については整理するというところでよろしいか。

< 了 承 >

委員長：「やれたぞ」を「やってみる」の方がいいのではないかな。また、全体の文言を子ども目線で表現していただきたい。

（３）学校名について

委員長：本日決めるのは難しいので、決め方とご意見をいただきたい。

委員：個人的感想だが、学校名が強すぎる。普通の「中央中学校」みたいなものではだめなのか。出身の学校を聞かれたときに言いづらいのではないかな。新しいものを求めすぎているように感じる。

事務局：補足させていただく。今は中学校について協議いただいているが、小学校の不登校も課題と認識しており、今後、教育委員会では小学校も対策が必要と考えている。釧路市では義務教育学校を進めており、空き校舎が出てくるので、小学校も含めた本校型の開校も考えており、地域性を含んだ名前にするのと引き継げないことから避けたところである。

委員：前回の説明では、学びの多様化学校を卒業していくということであった。私が危惧するのはレッテル張にならないかということである。

事務局：強い名前だとわかりやす過ぎてということであるが、それはあると思われる。

委員：５つ目の案の「虹伸みらい中学校」を「虹伸中学校」にするとにじいろ感がなくなると思う。他の中学校と名前がかぶっても制度上問題ないか確認したい。

委員長：もう一度、仕切り直していいかな。

事務局：どのように決めるのかは今回決めていただきたい。

委員長：投票や多数決、平場で話し合うなどがあるがいかがかな。

委員：案を見て話し合い、決まらなければ投票か多数決を行うことでいいのではないかな。

委員長：この案でよろしいかな。

< 了 承 >

（４）学校生活について

委員：登校方法は市内、阿寒音別も想定しているかはわからないが、どのように考えているかな。

事務局：徒歩、バス、ＪＲ、保護者送迎を想定している。

委員：それだと送迎できない場合は断念せざるを得ないと思うが、そういった子を拾うという考えはないのかな。声があれば検討するのか。

事務局：これ以外の方法はないと考えている。

事務局：かつてのさわやか学級、青空学級が旭小学校にあったときは、ＪＲを使って通っていた。大楽毛の場合はＪＲで通学できている。保護者の送迎をマストとするとご意見のとおり通えなくなる。また、阿寒地区、阿寒湖地区、音別地区から通うことは現実的に難しいと考えている。この学校ができることで市内すべての不登校生徒に対応することはできないととらえている。

委員：音や匂いなどいろいろなことに敏感な子どもも多い。給食が気になる。何か工夫ができたらいいいと思った。

事務局：給食については、不登校とは関係なく、強い拒否反応を示す子どもはこれまでもいた。一部給食や弁当持参は現在も行っているので、柔軟に対応したい。

委員：児童玄関活用が気になる。これしかないと思うが、担当の先生がついているという想定か。

事務局：そのとおり。

（５）登校時間について

委員：登校時間はやむを得ないと思う。一方で９時１５分までに来れない子どももいると思うので、「大丈夫だよ」というメッセージを伝えていただきたい。

委員長：それでは、９時１５分の案でよろしく願いたい。

（６）その他

委員：新設教科２について発言できなかったので一言発言したい。ソーシャルスキルの時間は大切である。ただやっておしまいではなく、子どもたちの日常に浸透していかなければならない。一律ですべての子どもが同じことをするのか、個々の子どものニーズに合わせて行っていくのかはあるが、子どもたちに生きていく形で考えていただきたい。

事務局：そのとおりである。授業の中だけではなく、折を見ていろいろなことができると思っている。個別か全体かについては、全体で行うこともあれば個別で行うこともあると考えている。

事務局：札幌のもみじ台中学校は特別支援教室の手法を不登校学級に取り入れている。そういった手法も学びながら、これから開発しようと考えているので、その際にご助言いただきたい。

委員：不登校から通えるようになった子どもはどのくらいいるのか。今までの学校のやり方ではうまくいかなかったのだが、多様な学校ができたからとい

って休む子はいっぱい出てくると思う。その時にその子たちにどうするのかが気になったところ。

事務局：前提として学ぶ意欲が高まっている子であり、一斉授業をするものであるが、勉強や人間関係で来づらくなる子も出てくると思っている。そのために「ソーシャルの時間」でトレーニングしたり、オンラインを前提とするわけではないが、それらも活用しながらいろいろな方法を考え柔軟に対応していきたい。